大阪インターナショナルチャーチ
2013/10/20
ブライアン・ブルエット牧師

イエスは嵐を静められる

導入

皆さん、おはようございます。大阪インターナショナルチャーチへようこそ。今朝、福音のメッセージを皆さんに分かち合う機会をダン牧師が与えてくださったことに心から感謝します。また、私たちを歓迎してくださった皆さんにも感謝しております。私たちが大阪に来て、今日で一ヶ月になりました。今は、皆さんの名前をはやく覚えようと頑張っています。私はこれまで、世界中の国を訪れました。その経験から、いくつか万国共通のものがあると思いました。例えば、音楽は世界共通です。言葉や文化が違っても、音楽を一緒に楽しむことはできます。また、子どもたちの遊ぶ声も世界どこでも同じです。アメリカでもここ大阪でも、公園で遊んでいる子供たちの声は聞いていて心地よいものです。私たちを悩ます恐れや不安も万国共通と言えるでしょう。地球上どこに住んでいても、人は健康や金銭面、人間関係、職業についての恐れや不安に悩まされます。皆さんも、こういった悩みを持っておられるのではないでしょうか。

メッセージ

今日は、イエスが弟子たちの恐れを静められたことについてお話します。今朝の聖書箇所マルコ4: 35-41は、その代表例です。

マルコ4:35-41
4:35 その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。

4:36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。

4:37 激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。

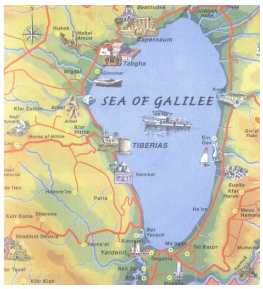
4:38 しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。

4:39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。

4:40 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」

4:41 弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

皆さんもご存じのこの聖書箇所の場面で、イエスはガリラヤ湖畔におられます。



ガリラヤ湖

ガリラヤ湖は、聖書の中で少なくとも3つの名前で呼ばれていることにお気づきでしょうか。ガリラヤ湖と呼ぶ個所もあれば、ゲネサレ湖、ティベリアス湖と呼ばれている個所もあります。このように別名で呼ばれるとわかりにくいこともありますが、実際には、湖に面している町の名前で呼ばれることが多かったのです。ガリラヤ湖というのはもちろん、ガリラヤ地方にちなんだ呼び名です。今日の個所では、イエスはその湖岸におられます。この日イエスは、病気の人を癒し、苦しんでいる人を慰め、キリストにある生き方の原則を教え、一日中、人々に仕えておられました。岸辺で忙しく仕えておられたようですが、みことばの教えは舟に乗ってなさったようです。

舟に乗るイエス

長い一日を終え、イエスは向こう岸に渡ることになさいました。

4:36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。

36節にあるように、弟子たちは群衆を残してイエスを舟に乗せて漕ぎ出しました。そこには他の舟もありました。舟が何隻か連なって岸を出たわけです。これは夜のできごとですから、あたりは真っ暗だったでしょう。そして37節、彼らは突然の嵐に見舞われます。

4:37 激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。

ガリラヤ湖は、そのような嵐が起こりやすい地形です。海抜マイナス213mで、周囲を山に囲まれているので、山からの風が湖に激しく吹きつけて、突風が起こるわけです。ガリラヤ湖は世界一海抜が低い淡水湖です。死海が一番低いのではと思う方もいるでしょう。そのとおりですが、死海には塩分やミネラルがたっぷり含まれており、淡水湖ではありません。私は、嵐の中、ガリラヤ湖をボートで渡ったことがあります。私が乗っていたボートはおそらく弟子たちの乗っていたものに比べれば3倍くらいの大きさだと思いますが、似た体験を実際にしたわけです。37節で、舟が波をかぶって水浸しになったとあります。私だったら、夜中に小さな舟で嵐に遭って、水が舟に入ってきたら、きっと不安になると思います。皆さんも、人生の嵐に見舞われて、自分ではどうにもならないという状況を経験したことはありませんか。冒頭で話したように、その内容は金銭面、仕事面、人間関係、健康面とさまざまです。そんなとき、「私がこんなにたいへんなときに、神様は寝ておられるのかしら。どうして」と思ったことはありますか。38節には、一見矛盾と思えるイエスの姿があります。

4:38 しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。

嵐の真っ只中で、イエスは舟の後ろのほうで寝ておられました。イエスがなぜ嵐の中でも眠れるのか考えたことはありますか。ふたつの理由が考えられます。日常生活の中で祈るように弟子たちを仕向けておられたのかもしれません。もうひとつ考えられるのは、永遠という観点をお持ちだから寝ておられたという理由でしょう。この嵐で弟子たちやイエスご自身の命が奪われることはないとご存知でした。イエスは十字架にかかられることが定められていたからです。ここには、キリストの人間性が色濃く描かれています。人の形をとった神は、私たちと同じ性質をお持ちでした。疲れたり、のどが渇いたり、お腹が空いたりします。同時に、この個所でイエスが嵐に対処されるさまは、キリストの神性をも鮮やかに描きます。38節で、弟子たちはイエスのもとに行きますが、そんな状況でイエスが寝ておられるのを見て、困惑しました。皆さんはどんなふうに起こされるのが好きですか。私たち夫婦は、交代でお互いを起こします。とくに週末なら、コーヒーを入れて寝室まで運んであげて、優しく起こすのですが、それを順番に交代でします。私はそれをけっこう楽しみにしています。けれども、ここで弟子たちがイエスを起こしたのはそんな優しい方法ではありませんでした。彼らはこう言いました。「先生、私たちがおぼれてもかまわないのですか。」弟子たちがキリストを叱りつけたというのは、とても興味深いと思います。とは言え、極度の不安と恐怖に直面していたのですから、仕方ないでしょう。私たちは、キリストを知っています。人生の嵐の中でも、みことばを読んで慰めを見出せるという特権に与っています。

皆さんは、人生の問題をあれこれ予測してみたことがありますか。つまり、将来起こり得ること、自分にはどうにもならないことを考えることです。誰でもいくらかは将来の不安を持っているのではないでしょうか。けれども、マタイ6:34は、その日一日をしっかり歩むようにと語ります。

マタイ6:34だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。

悩み。悩むのは健全なことではありません。心配しなければならないときも、もちろんあります。子どものこと、家族のこと、キリストをまだ知らない人のこと、こういった内容は、健全な心配ごとと言えるでしょう。一方、自分にはどうにもならないことを思い悩むのは、私たち自身にとって非常に不健康です。思い煩いを例えるなら、こういうことではないでしょうか。新しい車を買って持って帰り、家のガレージに止めます。車止めのブロックを置いて、エンジンをかけ、エンジンが壊れるまでふかします。そうして車から出てきて、どこにも行けなかったと気づくのです。思い悩むとはそのようなものです。自分にはどうにもならないことを思い悩んで、結果として自分自身の人生を壊してしまうのです。肉体的にも精神的にも霊的にもぼろぼろになって、何も成果はあがりません。だからこそ、神は、心配ごとを神にあずけるようにと私たちに言われるのです。次の個所がこれをうまく表しています。

ペトロ第一5;6,7 *5:6* だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただけます。 *5:7* 思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

自分を低くしなさい。自力で物事をしようとしてはいけません。神が全知全能で遍在なるお方であることをなかなか実感できないときもあるでしょう。つらくてたいへんなときは、そんなことを忘れてしまいがちです。このみことばは、神が私たちを高めてくださると語ります。それは、倒れていても立たせてくださる、落ち込んでいてもすくい上げてくださるということです。神は私たちにストレスを溜め込んでほしいとは思っておられません。過度のストレスはうつ状態を引き起こします。神はそのようなことを望まれません。主は私たちの喜びを満たすために来られたとおっしゃいました。だから、思い煩いをすべて神に任せなさい、神が私たちのことを心にかけてくださると言われるのです。私たちはそうしようとしますが、10分も経てば、またあれこれ悩んだり心配したりします。

私が何か悩みごとのあるときに好んで読む個所に、エレミヤ書29:11があります。

エレミヤ29:11わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。

この旧約聖書のみことばで、神が私にご計画を持ってくださることを思い起こします。そのご計画は良いものである、私が将来に希望を持つことを神が望んでくださっている、という約束を握りしめ、人生を歩みます。

では嵐に見舞われたイエスの話の続きを見ていきましょう。

4:39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。

39節で、弟子たちの願いに対してキリストがお応えになります。主は嵐を叱りつけました。イエスが声に出して叱る必要があったのか、それともそこにいた何隻かの舟に乗り合わせた人たちに聞こえるためだったのでしょうか。ここで、イエスの有名なことばが発せられます。「黙れ。静まれ」と言って、嵐に優る神性を表されました。

嵐を静めるイエス

イエスは冷静沈着です。嵐を静める権威をお持ちだからです。このお方は、天候もお創りになったお方だということを忘れてはなりません。

では、次の個所に進みましょう。

4:40 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」

まず弟子たちがイエスを叱りつけ、イエスが嵐を叱った後、今度はイエスが弟子たちに話しかけられます。「なぜそんなに臆病なのか。どうしてそんなに信仰がないのか」と問われました。

神に働いていただくことを良しとする勇気は、信仰が与えてくれると、私はこれまで生きてきて学びました。福音を大胆に語ることにせよ、悩みごとを解決していくことにせよ、同じです。詩篇46: 2もとても役立つみことばです。詩篇46:2 「 *46:2* 神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」 この個所を読んで、自分に問いかけるのです。どうして自力で問題を解決しようとするのかと。

次の41節では、これに対する弟子たちの反応が記されています。

4:41 弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

ここで弟子たちは、新しい恐れを持っています。これは嵐に対する恐れではありません。静けさから来る恐れです。彼らは、このお方が確かに神であることを知って、畏怖の念を抱いたのです。

<u>適用</u>

この話から学んだことを、どのように日常生活に当てはめればよいのでしょう。こんな奇跡は本当に必要だったと思いますか。教えるという観点からすれば必要でした。イエスがどういうお方かを示すためです。弟子たちの命という観点からすると、彼らは死んでしまうわけではなかったのですから、イエスが嵐を静める必要はありませんでした。弟子たちが本当に抱えていた問題は嵐ではありません。信仰が足りなかったことです。イエスを起こす必要もありませんでした。イエスが眠ったままでも、無事に向こう岸にたどり着いたでしょう。

私たちに当てはめるとどうなるでしょう。まず、人生の嵐はいつか必ずやってきます。迫害であるかもしれませんし、先ほど挙げたような金銭面、健康面、人間関係などかもしれません。こういったことは避けられません。私たちは、これらのできごとを用いて、クリスチャンとしての自らの歩みを試し、信仰が本物であることを証明できます。

ここで皆さんに、人生を恐れに支配されるべきではない7つの理由をご紹介したいと思います。

人生を恐れに支配されるべきでない７つの理由

1. 命を与えてくださる神なら、人生のあらゆることも任せられる
2. 取り越し苦労は今日を一生懸命生きることの妨げになる
3. 心配は百害あって一利なし
4. 神に頼る人を神は見過ごされない
5. 心配は、神への不信仰のあらわれ。また、神を知らないことのあらわれでもある
6. 私たちには神から科せられる課題がある。心配ばかりしていると、その課題に取り組めない
7. 一日一日をしっかり生きることで、心配に呑まれないでいられる

人生を歩んでいくには、神に全幅の信頼を置く必要があります。神は海を造られ、嵐を静めるお方です。神は力も逃げ場も与えると約束してくださるお方です。慰め主なる聖霊を送ってくださったお方です。また、弟子たちが簡単に恐れたことを非難するのは簡単ですが、彼らはイエスが本当の意味でどのようなお方であるかを知りませんでした。私たちは2000年もの間イエスのことを知らされてきました。ですから、人生の嵐に見舞われても恐れてしまったり不安でパニックになったりせず、キリストを信頼しましょう。